Research Institute for World History
Newsletter
No. 21 October 2013

CONTENTS

■「世界史研究所 世界史教育プロジェクト 発足」
世界史研究所事務局 —— 1 頁

■「朝日新聞「声」の欄にみる「世界史意識」」
南塚 信吾 —— 2 頁

■「核と「声」」
木村 英明 —— 4 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

世界史研究所「ニューズレター」
第21号（2013年10月）

世界史研究所 世界史教育プロジェクト 発足

世界史研究所が、世界史の教育と研究に関する韓国との共同企画に取り組み始めたことは、『世界史研究所ニューズレター』第 20 号でお知らせしたとおりです。その日本側主体として、去る 8 月 5 日、世界史研究所における会合で、世界史教育プロジェクトが発足しました。当日は、研究所スタッフに加えて、澤野理さん、廣瀬和義さん、松本通孝さんにご参加いただきました。その概要は次のとおりです。

はじめに、企画の趣旨として、下記の点を確認しあいました。①世界史と言われるものはいろいろとあるが、ここでは、一定の方法や視角で統一的に見た全体史として世界史をとらえることにする。②日韓の現実を見ると、日韓のナショナルヒストリー同士の比較や対話を進める　よりも、世界史認識を共有する方向に行くべきである。③日韓の世界史教育・研究の現状と歴史を系統的に、基礎的なところから検討することを目指す。④ソウルと東京で比較的小規模なミニ・コンフェレンスを数回開く。

続いて、話題提供の目的で、南塚信吾「明治以後の世界史の認識と教育について――見通し」、並びに、松本通孝「日本における対外観の育成と変化」の、二つの報告がなされました。前者では、明治から現在に至るまでの日本における世界史叙述の例を挙げながら、歴史教育の現状をふまえて、世界史の可能性を考察する意味について述べられました。後者では、特に第二次世界大戦後の日本の歴史教育について、対外関係の変化と歴史研究の動静とに関連した自国史と外国史の問題として、紹介されました。また、それぞれの報告を題材にして、問題点と現状を共有する目的で、質疑応答がおこなわれました。

その後、このプロジェクトにおける研究分担について、議論しました。明治以降の日本の歴史教

育を、いくつかの時代に区分して、世界史の認識や教育実践などのテーマで分業する場合、どのような人選が可能か、韓国との共同企画となることも考慮しつつ、話し合いました。

以上のような合意事項をふまえて、目下、メンバーおよび担当テーマの拡充を図っています。さしあたり、来たる 11 月 23 日（土）午後 5 時より世界史研究所会議室にて、澤野理さんと吉嶺茂樹さんにご報告いただく会合を予定しています。

（世界史研究所）

世界史教育プロジェクトの目的の確認

本プロジェクトの目的について、いくらかの疑問が出ているので、あらためてそれを整理しておきたい。

本プロジェクトの出発は、韓国側からの働き掛けを受けて、明治以後の日本の「世界史」教育・研究の情報を整理して、国外に発信することを目指していた。

しかし、われわれの世界史研究所がそれを行うということは、世界史研究所の理念として掲げる世界史の考えかたに即して、それを行うということにならざるをえない。したがって、本プロジェクトの目的を言い直すならば、あくまで、日本史と区別された「世界史」ではなくて、日本の歴史も包み込んだ一体としての世界史を目指すという観点から、明治以後の日本の「世界史」教育・研究を見直すということにならざるをえないわけである。そのような観点からすると、われわれの研究プロジェクトは、より具体的には、明治以降、なぜどこで世界史が日本史・東洋史と区分されたのか。他にどういう可能性があったのか、世界史を一体として考えていく可能性はなかったのか。あったとすればどういう可能性だったのか。そして、今日ではどういう可能性が試みられているのか。このような論点を意識して研究していくことになるであろう。

このような徹底した視角からの研究はこれまでには出ていないのではないだろうか。そこが本プロジェクトの「存在理由」である。

（世界史研究所所長 南塚信吾）

朝日新聞「声」の欄にみる「世界史意識」

南塚 信吾

過去 1 年弱の間に、日本における歴史認識、歴史観が、国民のさまざまな層で問題になっている。たとえば、それは朝日新聞『声』の蘭における各層からの投稿に表れている。この 1 年ほど、「歴史」がテーマとなった時代はないのではないだろうか。しかも、それを系統的に見てくると、好むと好まずにかかわらず、日本における歴史認識や歴史観が「日本史」のみの問題ではなく、日本もその一部をなす「世界史」の文脈において論じられていることが見えてくる。そのよい例が「侵略」の定義という問題であろう。

安倍首相は 2013 年 4 月 23 日に、「侵略という定義は学界的にも国際的にも定まっていない。国と国の関係でどちらから見るかで違う」と発言した。これは直ちに中国や韓国によって、日本の首相が侵略を否認したものと受け止められた。国内の政治の世界でも批判はすぐに現れたが、『声』

の欄では、さっそく翌 4 月 30 日に 74 歳の無職の男性が、国連の 1974 年における「侵略の定義に関する決議」の存在を指摘し、「侵略」の問題は日本のみの問題ではなく、世界史の問題であることをわれわれに認識させている。5 月 23 日には、29 歳の会社員の男性が、「こんな政治家に未来託せない」という投稿において、石原慎太郎が「あの戦争を侵略だと規定することは自虐でしかない」と述べた点を取り上げて、こういう発言は戦争を正当化させてしまいかねないと批判した。5 月 25 日には、小学生の時にマレーシアのインターナショナルスクールで学んだことのある 16 歳の女子高校生が、クラスで真珠湾攻撃についての議論をした時の体験から、「首相は歴史踏まえ発言して」という投稿をして、歴史の教科書にも出てくる「当時の日本兵の非人道的な行動」など事実を踏まえた発言をしてほしいと注文を出した。5 月 26 日にも 65 歳の無職の男性は「政治家は侵略の定義を学べ」と題する投稿において、1943 年のカイロ宣言と上記の国連決議を指摘して、「侵略」の定義は世界史的に定まっており、そのことを無視する政治家は「勉強不足」であり、「過去に目を閉ざす者は未来も見えなくなる」のであり、「過去に学ばぬ政治家に、国の未来を語る資格はありません」と断言した。7 月 9 日には、74 歳の無職の男性は、「首相は侵略の歴史認識を語れ」という投稿において、日本記者クラブ主催の党首討論会での安倍首相の発言を「あいまいな態度」であるとし、かつて西ドイツ首相のワイツゼッカーが議会で述べた「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目になる」という上記の発言を想起させた。

「侵略」という事態はそもそも日本史だけでなく世界史的な場で問題にされるべきものであるが、それが日本だけの問題のように論じられていることへの、自然な反応がここに出てきているということができる。「侵略」の定義問題に関する「声」はまだ多々あるが、この程度にとどめておくことにして、以上の投稿から見えてくる歴史の方法の問題を検討してみたい。

「侵略」の定義問題が登場してすぐの 5 月 20 日に、93 歳の歴史研究者が「歴史学者からも一言言わせて」という投稿をして、安倍首相が「侵略」発言に関連して、「可能な限り多くの史料に接し、それを批判的に検討し、できるだけ正確に歴史を解釈し事実を理解し知ろうとする」「圧倒的多数の研究者」は「侵略」の定義をきちんと下しているのであり、定義が定まっていないというのは「歴史に対して予断を持ち、都合の悪い史料は無視し、都合のいい史料だけを拾って歴史を作り上げようとする」少数の人たちではないかと批判した。ここには、歴史認識に重要な「史料」の問題が指摘されていた。

また、6 月 26 日には、58 歳の大学院生の女性が「記録外し、歴史修正より悪い」との投稿において、2012 年度版エネルギー白書に脱原発の官邸前抗議や前政権の「原発ゼロ」政策が書かれていない点を取り上げて、「あったことを無かったことにする」「現代史の書き換え」が行われていることに注意を呼び掛けている。史料や歴史記述の「恣意性」を突くものであるが、これも歴史認識の重要なポイントである。

だから、7 月 6 日の女子高校生の投書「きれいごとだけの教科書」で、彼女が、「教科書にはき

れいごとしか書かれていない」、「教科書にはきちんと事実を書いてほしい」と訴えているのはよくわかるが、歴史記述というものの「意図性」「イデオロギー性」や、教科書が種々の政治的立場の闘争の結果としてできていることを高等学校でも教育していく必要があることが、知らされる。

8 月 2 日の無職の 68 歳の男性は、中東の紛争や、日中、日韓の反目などは歴史を学んで初めて分かってくるのであり、「歴史が現代に生きている」ことが実感できるが、さらに、「日本の近現代史を、世界史の流れの中で学び直し」て見たいと述べている。こうして、われわれの身近な出来事を理解するために、歴史を広い世界史の中で見て行く必要性をおのずから認識して来ているわけである。

では、その世界史はどのようなものとして期待されているのだろうか。8 月 15 日の 90 歳の無職の男性の「声」が示唆的である。この男性は旧満州で 2 年半の兵隊生活を送り、敗戦でソ連に抑留され、収容所で朝鮮出身の兵士たちが「日帝 (支配)36 年の恨みをはらす」として日本兵を「私刑」したことを体験している。その際、男性は、親しい朝鮮人兵士との語らいの中で「支配された側には、家族を殺し、故郷の家々を焼き壊した日本兵がまつられているのが靖国神社なのだということ」を知ったと言う。そうして「こうした経験を、今も続く歴史認識の違いを考える一助にしたい」と吐露している。この重要な告白は、世界史を考えるさいに出てくる、人間の「認識能力の限界」という問題につながる。つまり世界史をえがくにはいろいろな立場からのえがきかたがあるが、自分の立場を絶対視せず、別の立場からの世界史もありうることを認め、その上で、どのような立場からの世界史が最も多くの人に受け入れられうるのかを考えるという問題である。

核と「声」

木村 英明

かなりの程度を異集団間の紛争の経緯が占めている人類の歴史において、広島と長崎への原爆投下が持つ意味は計り知れないほど大きい。世界はいま、地球上の全生命体の存続を危うくする規模の核兵器を保有している。過去にそれが人に対して用いられたという事実は、現在と未来の誰しもの命につながる問題としてわれわれを歴史に向き合わせる、際立った指標といえるだろう。しかし、核をめぐる議論が延々繰り返されるあいだにも、被爆の不幸が止むことはなかった。核産業に携わっているわけではない日本の住民に限れば、1954 年の第五福竜丸事件があり、そして収束にどれほどの時間を要するのか一向に見通しが立っていない、2011 年の福島第一原発事故がある。

日本の各主要日刊紙は、毎号 1 面近くを読者の意見掲載に使うという、おそらく世界でも少数に属する編集方針を持つ。第 2 次世界大戦後一

般化したこの投書欄（朝日新聞の「鉄箒」をはじめ戦前にも存在したが、公権力によるメディア介入が珍しくなかった時代にその意味合いは異なる）には、折々に、核問題にたいする読者の敏感な反応が掲載され続けてきた。そのなかでも、第五福竜丸の保存運動を呼びかけた、1968 年 3 月 10 日「声」欄の投書はよく知られている。「沈めてよいか第五福竜丸」と題されたそれは、23 名の乗組員を乗せ、太平洋ビキニ環礁におけるアメリカの水爆実験の灰を浴びた同船が、東京湾の埋め立て地に打ち捨てられていることを社会に周知させた。26 歳の会社員男性は「決して忘れてはいけないあかし」として、「原爆ドームを守った私たちの力でこの船を守ろう」と訴えた。この投書をきっかけに広がった保存運動の結果、1976 年に「都立第五福竜丸展示館」が開設された。同館にはこの投書全文のプレートが掲示されている。

チェルノブイリ原発事故と並ぶ、世界の産業史上最悪の災害となった福島第一原発事故については、この 2 年半、様々な意見が間を置くことなく投書欄に寄せられてきた。ここでは、あまたある興味深い投書から、事故後 2 ヶ月少し経た 2011 年 5 月 27 日の「声」欄に掲載された「福島の高校生の絶望聞いて」を挙げておこう。投書者は福島の定時制高校教員。高い放射線量にもかかわらず福島市が避難区域に指定されないことに、「俺たちは経済活動の犠牲になって見殺しにされている（…）いっそのこと原発なんて全部爆発してしまえばいいんだ！」と憤る 4 年生と、働き先を失い「なんで俺ばかりこんな目に遭わなくちゃならねえんだ。どうせなら日本全部が潰れてしまえばいい！」と吐き捨てる 2 年生の発言が紹介されている。投書者はその後、「岩波ブックレット」に 3.11 後の福島の教育について執筆されていて、現況と歴史に臨んで明確な姿勢をお持ちの方とお見受けする。高校生たちの言葉は過激で、禍々しくさえ響く。しかし、そもそも原発建設地に選ばれた時以来、国内で少しずつ「周縁化」されていった彼ら住民の怒りには、無視できない倫理性が含まれているのではないだろうか。誤解を恐れずにいえば、その言葉には、冷戦終結後に加速したグローバリゼーションのなかで、世界各地のマイノリティ化した（正確には、マイノリティであると意識させられるようになった）集団内にしばしば暴力的感情を惹起してきたのと同じ、あるべき権利を阻害された者のまっとうな不満が感じられる。

依るべき土地を失い崩壊に瀕している福島の自治体の現況を、63 歳無職男性は、今年 9 月 14 日の「声」欄に「五輪決定の日の荒れた被災地」と題して報告している。南相馬市の農業者の友人の自宅は原発 20 キロ圏内にあり住むことを許されない。「商店街は無人と化し（…）駅の駐輪場には、多くの自転車が並び、震災時のまま放置されていた」。日本でもっとも富裕な東京湾岸地域中心に開催が決定したオリンピックについて意見を問う投書者に、いまだおよそ 15 万人が避難している福島の友人は、「汚染水の問題が世界に明らかになり、注目されただけでもいいかな」と、笑いながら答える。

諸国家が覇権を競い合ってきた近代世界に癒せぬ瑕疵を残した核兵器、そして国境線の内側にも

深い亀裂を生んだ原発は、各自の歴史意識を喚起　を発することを求め続けるだろう。

しつつ、これから幾世代にもわたって、住民に「声」

お知らせ

連続公開講演会

世界史研究所では、戦後派研究会編集『21 世紀歴史学の創造』全 9 巻 (有志舎刊) の完結を記念して、下記のように 3 回の連続公開講演会を開催します。学生、研究者、社会人を問わず、ふるってご参加ください。

第 1 回　藤田 進 氏 「シリア・エジプトと歴史学」 2013 年 12 月 23 日（月・祝日）
第 2 回　清水 透 氏 「いのちの歴史学」 2014 年 1 月 19 日（日）
第 3 回　油井 大三郎 氏 「日本の原発導入と日米関係」 2014 年 2 月 11 日（火・祝日）

時刻： いずれも午後 3 時〜午後 5 時（終了後、懇親会）
場所： 世界史研究所会議室（渋谷アイビスビル 10 階、地図参照）
参加費： 500 円

＊各講演後、『21 世紀歴史学の創造』全 9 巻の割引販売およびサイン会を開催します。
＊問い合わせ先： NPO-IF 世界史研究所（ 電話 03 3400 1216、E メール world_history@npo-if.jp ）

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2013 年 10 月 10 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ

所　長　南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問　下村 由一（千葉大学名誉教授）
　　百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員　木村 英明（早稲田大学講師）
　　木村 真（日本女子大学講師）
　　姉川 雄大（千葉大学特任助教）
　　崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
　　鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員　稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
　　近藤 正憲（学術博士）